

論文審査の結果の要旨

氏名：石 井 和嘉子

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：小児および思春期の起立性調節障害患者における抑うつ・不安と腸内フローラに関する検討

審査委員：(主 査) 教授 内 山 真

(副 査) 教授 越 永 従 道 教授 吉 野 篤 緒

教授 亀 井 聡

起立性調節障害は小児期・思春期の心身症として重要な疾患である。本疾患では起立性低血圧およびそれに関連した身体症状に加え、抑うつ状態や不安などの精神症状を合併することがある。これまでに、本疾患の発症、臨床経過には心理社会的因子が強く影響していることが指摘されてきた。しかし、小児期・思春期における起立性調節障害の詳細な病態生理については、明らかになっていない。さらに、本疾患が精神症状を合併する機制については不明である。

近年、成人における心身症や抑うつ・不安などの精神症状と腸内細菌バランスの不良との関連が指摘されている。プロバイオティクスなどの補充により腸内細菌バランスの異常を改善すると精神・身体症状が改善するとの報告もある。本研究において、著者は小児期・思春期の心身症である起立性調節障害においても、成人の心身症やうつ病と同様に腸内細菌バランスの乱れが症状発現に関連しているという仮説を立てた。この仮説を検証するために起立性調節障害患児と対象健常児の臨床症状および糞便中の細菌について検討した。

糞便中の細菌については、terminal fragment length polymorphisms 解析を用い、それらの系統分類やそれぞれのバランス、多様性について、起立性調節障害の有無、抑うつや不安との関連から検討した。その結果、起立性調節障害患者では、糞便中の *Clostridium* subcluster XIVa and/or *Enterobacteriaceae* がコントロール群と比較して高いことが明らかであった。

斬新な仮説に基づく意欲的な研究であり、目的の設定、方法論ともに適確かつ緻密に構成されている。よく練られた方法論により、小児期・思春期の心身症のひとつと考えられる起立性調節障害について、新奇性のある結果が得られ、学術的および臨床的意義は極めて高い。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

平成 31 年 2 月 27 日